



# 朝鮮通信使と大津

—— 送迎のため逢坂越を整備 ——

## 注目をあつめる朝鮮通信使

平成4年11月20日、国の文化財保護審議会は、重要文化財や史跡24件の指定を文部大臣に答申しましたが、そのなかに朝鮮通信使関係の史跡3件が含まれています。広島県福山市鞆町の福善寺境内、岡山県牛窓町の本蓮寺境内、静岡県清水市興津の清見寺境内の3件がそれです。この朝鮮通信使については、近年大変な関心の高まりを見せており、通信使の通過した日本の各都市でのイベントやセミナーが数多く開催され、また多くの博物館で企画展が催されています。大津市歴史博物館でも、平成4年2月11日から16日まで巡回展「宗家記録と朝鮮通信使展—江戸時代の日朝交流—」が開催されましたし、通信使関係の資料も新たに各地で発見され、新聞紙上を賑わせています。お気づきになった皆さんも多いことでしょう。

さて江戸時代、幕府が正式な外交関係を持っていたのは、お隣の国・朝鮮だけでした。それは豊臣秀吉の朝鮮半島侵略の後、両国の関係修復というかたちで出発したものです（但し両国の外交関係は室町時代から行われており、江戸時代の外交関係は、その再出発ともいえます）。朝鮮国王は、江戸幕府の将軍が新たに就任するたびに、それを祝賀する大規模な使節団を日本に派遣しました。朝鮮通信使とは、その使節団のことを指して呼びます。

通信使は漢陽を出発して朝鮮半島を南下、釜山から対馬にやってきます。朝鮮と日本（江戸幕府）の仲介をし、日朝外交を担当していたのが、対馬藩の宗氏だったので、同藩が以後江戸まで通信使の行列に従ってさまざまなお世話をしたのです。対馬を出発した一行は瀬戸内海を東行、大坂から淀川をさかのぼり



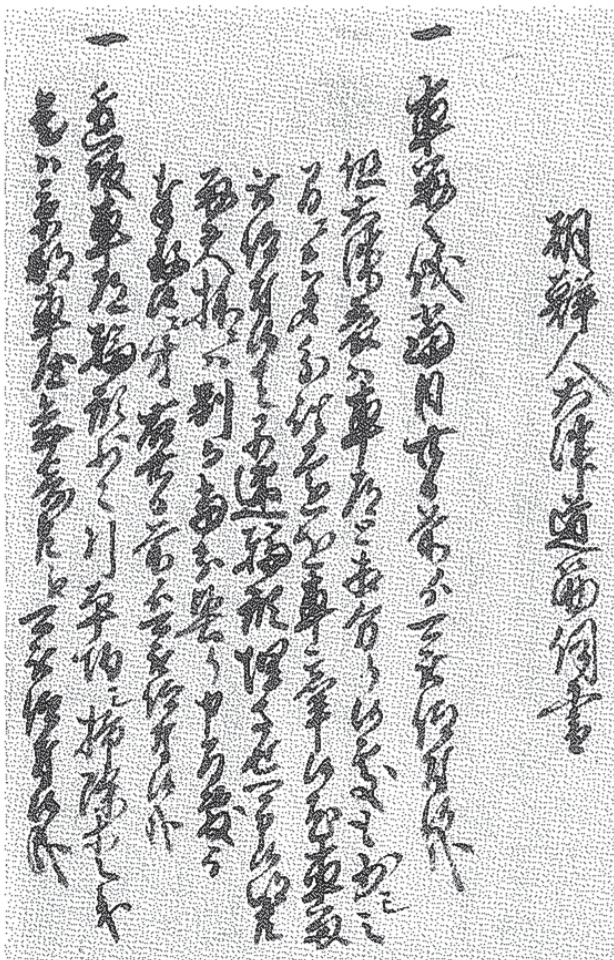
朝鮮通信使の行列図 辛基秀氏所蔵

淀で上陸し、京都・近江を通過して名古屋に出、そこから東海道を江戸へと進んだのです。享保4年（1719）の使節団派遣の場合、同年4月11日に漢陽を出発し、江戸へ行って再び漢陽に戻ったのは翌年の正月24日だったといえますから、かなりの長期間の大旅行だったわけです。

近江国内のルートは、大津から草津に出て、行畑（野洲町）で中山道と分かれ、近江八幡、安土を通過して鳥居本（彦根市）で再び中山道に合流していました。この行畑から鳥居本までの道は、今でも朝鮮人街道（朝鮮人道）と呼ばれ、地元の人々にその歴史が語り継がれています。ですから彦根の宗安寺を初め、各地に通信使の残した足跡が刻まれており、今でも目にすることができます。

#### 通信使文書に見える逢坂越

今回は、そういった史跡の紹介は他の書物に譲り、大津市歴史博物館で所蔵している通



朝鮮通信使関係文書 大津市歴史博物館所蔵

信使関係の古文書から伺える大津と通信使の関係や、当時の街道のありさまについて、簡単に紹介してみたいと思います。

この古文書は、延享5年（1748）の通信使の様子を記録したものです。内容は、通信使一行の逢坂越通過に先立って、京都町奉行所の目付方役人赤井平助なる者が提出した伺書など4冊です。まず「朝鮮人来朝に付大津道筋伺書」と表書きされた一冊から、その内容を見ていきましょう（写真参照）。

延享5年3月付で出されたこの伺書は、全部で8カ条からなっており、いずれも前回の享保4年（1719）のときの例によって今回の対処の仕方を再度確認したものです。

さてそのなかから、興味深い内容を抜き出して、以下に口語訳をしてみますと、

- ① 逢坂越で荷物を運ぶ牛車の通行止は、いつ頃からすればいいでしょうか。街道筋は車道と歩道に分かれているところも少ないので、車の轍を埋めなければなりません。雨天の時などは固まりにくいので、通信使到着の20日前頃からは良いのではないのでしょうか。
- ② 以上の作業や街道筋の掃除は、今まで京都の車屋たちが行っていたと、大津の町役人たちは申しています。今まではその通りだったようですから、今回もそのようにすればどうでしょうか。

京都・大津間の逢坂越は、北国等から琵琶湖を大津まで回漕された年貢米などの諸物資を、京都まで運ぶ重要な道路でした。そのため多くの牛車が往来しており、通行をスムーズにするため早くから歩道と車道が分かれ、車道は歩道より一段低い所に通されていました。いっしょの平面上であれば「交通事故」の心配があったからです。しかし、両道が分かれているところは、①にも書いてあるとおり少しの間で、別の絵図によれば日の岡峠と逢坂峠の坂の急な所だけで、あとは人間の往来するところを牛車も通行していたのです。



『近江名所図絵』に見える逢坂越 牛車の通る車道が描かれている 大津市歴史博物館所蔵

そしてそれら道路補修の作業は、②にあるように、京都の車屋たちが行っていました。通信使を迎えるため、轍を砂で埋めて道路の補修に精を出す人々の姿が目浮かんできます。

### 花壇もあった逢坂越

またこの古文書には、次のような条文も書かれています。

③ 街道筋の「塵芥札」は、中関寺町と境川町の二ヶ所に一枚ずつ建っています。中関寺町の札は街道筋より少し奥へ入った所にあるので見えませんが、境川町の札は道路沿いにあり目立ちますので、撤去したほうがよいでしょうか。

このように、街道沿いに「塵芥札」が立っているということは、街道筋や町から出るゴミの集積所が、一定のところ決められていたことを示しています。大津では、それが逢坂山を越えて大津の町中に入ろうとする所、つまり中関寺町に一ヶ所、また大津の市街地から松本村に出る所の境川町に一ヶ所設置さ

れていたようです。都市としての衛生管理、景観の保全が、江戸時代から大切なものと考えられていたことがわかります。

これは何も大津だけのことではなく、京都でも通信使通行の道沿いにある塵芥札は撤去が命じられていました。汚れた場所は見せないというのは、通信使に対する心づかいでもある反面、日本を良くみせようとする「見栄っぱり」な意識が働いていたということなのでしょう。

その他にも興味深いことがたくさん書かれています。以下、まとめて紹介しますと、夜間の通行のために、街道沿いで高張提灯を立てる場所が決められています。その場所は、逢坂越の追分町から下大谷町までで四ヶ所、そして大津の市街地は人家の行灯や家から漏れる明かりがあるので省略され、境川町と和泉町の間にならび一ヶ所となっています。当時は逢坂越や、大津の町中から松本村に通じる道筋は人家もまばらでひっそりとし、夜間の通行

には不便だったのです。

また別の条文には上記の他、逢坂山の前後130間の区間に15張の高張提灯を設置するように指示されていますが、ここでおもしろいのは、同じ条文のなかの但し書に、「車道花壇の方、片側に提灯差し置き候」とあるところ（<sup>せうろう</sup>）です。逢坂越の道沿いには、一部分でしょうが、「花壇」が設けられていたのです。この花壇は、別の資料でも存在が確認されています。江戸時代、街道筋の整備はうるさく言われ、松並木や一里塚、道標などが設置されていました。松並木のうっそうとした枝葉は夏の酷暑に涼しさを提供しましたし、一里塚や道標は、迷わないための道案内として設置されていました。実はその他にも、旅人の疲れをおそらく癒すであろう「花壇」が、スペースをとって設けられていたのです。この「花壇」は全国的に見てどうなのか、誰が費用を払って設置したのかは分かりませんが、後にも出てくる「公衆便所」とともに、街道筋の景観保持や環境保全に大いに役立っていたことでしょう。それらの花々はまた、朝鮮通信使の目にもやさしく映ったにちがいません。

さらに、市街地の家並みに行灯を掛けるようにという指示も出ています。この行灯はありあわせのものでよく、とくに新調することはないとされていますが、「格別大小の不同これ有り、または紙煤候ては見苦しき」というので、紙の張り替えだけは命じられていたようです。通信使一行を出迎えるためのきめ細かい指示が出されていた様子が分かりますし、またオーバーな対応をして町人に無用の負担をかけないように、との配慮も示されていたのです。

#### 江戸時代の街道は衛生的

次に、同じく延享5年の通信使送迎に対する準備を書いた別の記録によって（大津市歴史博物館所蔵）、大津町に出された触書（法令）をしばらく見てみましょう。

#### ④ 街道筋に設置された雪隠（公衆便所）

は壊れている箇所を修繕し、葭簀で囲っておくように。

- ⑤ 上関寺町から鍛冶屋町まで、溝には蓋をしておくように。
- ⑥ 道筋にはみ出している樹木の枝は伐採しておくこと。
- ⑦ 酒屋の看板などは10日前に取り外しておくこと。
- ⑧ 通信使が幕府に献上する「御鷹」や「御馬」の休息場所は、西は八町通りのうち博労町、東は京町通りの内寺町の入口に縄張りをし、旅人や牛馬の出入りを禁止すること。

④の雪隠に関する規定は、別の資料に「仮雪隠」と記されるものもあり、通信使通行に際して特別に設置されたのでしょうか。ただし当時、江戸時代の街道には、この手の公衆便所は常設されていたようで、そこで採れた糞尿を周囲の農民が田畑の肥料として使用していたらしく、日本を訪れた外国人も、日本の道路の衛生的なことに驚いているほどです（ケンペル『江戸参府旅行日記』）。自然のサイクルを生かした当時の公衆衛生の考えは、思いのほか発達していたようです。このことはまた、先に見た塵芥の投棄場所の設定や、花壇の設置と合わせて、街道保護政策の一環としても注目すべきことと言えましょう。

以上、朝鮮通信使を迎える大津や逢坂越のありさまを、当時出された触書によって見てきました。そのなかから、次々に出される幕府からの指示によって、使節団応接のため街道の補修につとめる大津の町人たちの様子が伺えましたし、それとともに当時の街道筋が意外に整備されていたものであったことも、お分かりいただけたことでしょう。これからも機会があれば、大津における朝鮮通信使や街道の興味深い話を紹介してみたいと思います。

（樋爪 修氏 提供）